ROMAN de MARON

青柳はるな（演出家）

小野ヨーコ（役者）

本条たけし（役者）

御法川えま（役者）

相沢かれん（スタッフ）

青柳じゅんいち（オーナー）

場所：劇団の稽古場、じゅんいちから借りている

1場

楽しげな様子でみんな出てくる

かれん「本日は劇団アジフライの公演にお越しくださり、ありがとうございます。開演に先立ちまして、お客様にいくつかお願いがございます。
一つめ、携帯電話、スマートフォン、タブレット、時計のアラームなど音の出るものの電源はお切り下さい。マナーモードの振動も周りのお客様のご迷惑になることがありますので、ご協力よろしくお願いいたします」

かれん以外のメンバーが迷惑になる場面を演じる

かれん「二つめ、会場内での飲食、喫煙は禁止となっております。また、ビデオやカメラなどでの記録行為も劇団の認めたもの以外は禁止しております」

かれん以外のメンバーが迷惑になる場面を演じる

かれん「三つめ、非常の際にはスタッフが誘導いたしますので、慌てずその場でお待ちください」

かれん以外のメンバーが非常事態を演じる

かれん「上演時間は約一時間を予定しております。途中、休憩はございません。お手洗いは入口の扉を出られて、正面左手にございます」

かれん以外のメンバーが途中退室する場面を演じる

かれん「間もなく開演いたしますので。今しばらくお待ち下さい」

楽しげな様子でストップモーション

オープニング

場面は駅のホーム。シンジ（たけし）が荷物を持って出てくる。えま以外のメンバーは、車掌や電車、他の乗客などを演じる。

シンジ「あぁ、しばらくこの景色ともお別れかぁ。今まではあっちの電車に乗ってたけど、今日はこっち。俺は新しい道を行くんだ。夢を叶えるまでは絶対この町には帰らない」

アナウンス「間もなく三番線に電車が参ります。白線の内側に下がってお待ち下さい」

シンジ「さて、いっちょ行きますか」

電車がやってくる。ホームの端からミサキ（えま）が走ってくる。

ミサキ「待って。ねぇ、待って」

シンジ「ミサキ。お前、どうしてここに…」

ミサキ「決まってるでしょ。おばさんが教えてくれたの」

シンジ「…言うなっていったのに」

ミサキ「しょうがないじゃん。仲良しだもん、おばさんと」

シンジ「悪いな、わざわざ見送りなんか」

ミサキ「それはいいけど…でも何で言ってくれなかったの？」

シンジ「何を？」

ミサキ「出て行くこと」

シンジ「あぁ…」

ミサキ「別にいいけどさ…シンジの夢なんだし。でも黙って出て行かれるのは…」

シンジ「お前でも寂しいって思うんだ」

ミサキ「寂しいなんて言ってない。調子のるな。そんな何かコソコソされると腹立つだけ」

シンジ「それはどうもすみませんでした」

ミサキ「幼稚園からずっと一緒にいたのにさ、大事なこと話してくれないんだ」

シンジ「いや、お前もなんか忙しそうだったからさ。大学行くんだろ」

ミサキ「うん」

アナウンス「間もなく電車が発車いたします」

電車の発車ベルが鳴る

シンジ「じゃあ、行ってくる。あ、さよならじゃないから。また会えるから」

ミサキ「…うん、頑張って」

シンジ「じゃあな」

ミサキ「待って！」

ミサキ、電車に乗ろうとするシンジを引き止める。電車が動き出す。

シンジ「どうしたんだよ」
ミサキ「ごめん…」
シンジ「まぁ、いいけどさ。次の電車でも」
ミサキ「…ごめん」
シンジ「だから大丈夫だって。俺ももうちょっと話したかったし」
ミサキ「あのさ…」
シンジ「ん？」
ミサキ「待ってるから」
シンジ「え？」
ミサキ「有名になるの、楽しみにしてるから。シンジがいなくなっちゃうのはすごく…寂しいけど」
シンジ「なんだ、いつでもこっちこいよ、そんなめちゃくちゃ遠いわけじゃないんだし」
ミサキ「うん…そういう意味じゃないけど…」
シンジ「え？」
ミサキ「なんでもない」
アナウンス「間もなく電車が参ります。白線の内側に下がってお待ち下さい」
シンジ「早いな、もう来た」

電車がやってくる。

シンジ「じゃあな、今度こそ行ってくる」
ミサキ「うん…行ってらっしゃい」
シンジ「あぁ」
ミサキ「シンジ」
シンジ「ん？」
ミサキ「好きだよ」
シンジ「え？」
ミサキ「なんでもない…」
シンジ「ばーか」
ミサキ「え」
シンジ「ずっと前から好きだったよ」

ミサキ「…」
シンジ「お前と初めて会った時から、ずっと好きだったよ」
ミサキ「…だったら何でもっと早く言ってくれなかったの」
シンジ「仕方ないだろ。タイミング逃したの」
ミサキ「なにそれ、ばーか」
シンジ「なんだよ」
ミサキ「シンジ…」
シンジ「はい」
ミサキ「…好きだよ、ずっと大好きだった。これからもずっと…」
シンジ「ミサキ」

二人、いい雰囲気になる。

ミサキ「え、ちょっと…」
シンジ「なに」
ミサキ「やめてよ、こんなとこで」
シンジ「誰も見てないよ」
ミサキ「見てるよ、めっちゃこっち見てるから」
シンジ「いいじゃん、お互い好きなんだから」
ミサキ「そういう問題じゃ…ちょっと…」
シンジ「好きだ。ミサキ、好きなんだ」

もみあう二人。

はるな「はい、ストップ！ちょっと、みんな集合」
　４人「はい」

４人（ようこ、たけし、えま、かれん）が、はるなの周りに集まる。

はるな「どう思う？」
　４人「え」
はるな「今の」
　４人「今の？」
はるな「今のって言ったら演技しかないでしょう」
　４人「あぁ」
はるな「あぁ…じゃないよ。ようこさん」

ようこ「わたし？」
はるな「自分の演技、どう思った？」
ようこ「うーん、そんなおかしくなかったと思うんだけど」
はるな「うん、別におかしくなかった。でもすごく良くもなかった。これ、どういう意味か分かる？」
ようこ「でも、私この場面メインで出てないし」
はるな「そんなこと言ってちゃダメなの。ようこさんのお芝居ひとつで、ここがどう見えるか決まってくるの。もっと、もっとさ新しい可能性を探ってみて」
ようこ「やってみます」
はるな「よろしく」
かれん「あのぅ…はるなさん」
はるな「なに」
かれん「あの、最初にお客さんに説明するやつと電車の役なんですけど」
はるな「あぁ、どうかした？」
かれん「あれって、かれんが絶対やらないといけないんですか」
はるな「え」
かれん「なんかすごい緊張しちゃって。誰か代わってくれないかなって」
ようこ「え、緊張してたの？すごーい、全然そんな風に見えなかったよ」
かれん「ほんとですか。フフ、やればできる子なんです」
はるな「じゃあ、やって。やれば出来るなら是非やってください」
かれん「でも、かれんはスタッフなのに…」
はるな「贅沢言っちゃダメ。いい？世の中にはね、やってもやっても出来ない子もいるの。報われない子もいるの。それに比べたら断然いいじゃん。緊張してもサラッと出来ちゃうんだから。だから、ね、やってよ」
かれん「えー、ちょっと考えてみます」
はるな「考えないで。やってくれたらいいから」
たけし「おー、これがゆとりってやつか」
ようこ「違うと思うよー。だいたいもう古すぎる」
たけし「え、そうなの？」
ようこ「ゆとりって、たけしくんの年代くらいからでしょ」
たけし「あー、そうだっけ。言われたことあるような無いような」
はるな「そうだ、ミサキのテンション、もっと上げれない？」
えま「テンションですか」
はるな「そう、今のだとちょっとしんみりしすぎなんだ。もっとずっと好きだったっていう勢いが欲しいの」
えま「勢いですか」

はるな「そう。シンジはさ、初めて会った時から好きだったって言ってるから、そうだな、ミサキも同じぐらいにしとこうか。それならより気持ちが入るでしょ」
えま「あの、一応、確認なんですけど、この二人の年齢って…」
はるな「十八」
えま「ですよね…」
はるな「なに、なんか問題ある？」
えま「いや、正直、わたしに十代の役は厳しいっていうか」
たけし「おーい、えまちゃんがそんなこと言ったら俺どうなんの。もう、三十一なんですけどー」
えま「でも、本条さんは違和感なさそうっていうか、抵抗なさそうっていうか…なんかはまってますよね」
たけし「分かる？そうなんだよ、すごく楽しいんだよ。三十一でもこんだけ楽しいんだよ。えまちゃん、絶対もっと楽しいでしょ」
はるな「そうだよ、まだ二十二、三でしょ？十八なんてついこの間だって。全然、問題ない」
えま「いや、でも…」
はるな「考えてみて。本条さんは役を楽しんでるの、どうにか爽やかさを出そうとしてるの。それなのに、えまが出来ないみたいなこと言ったら本条さんに失礼でしょ。あんなオッサンでも必死なのに」
たけし「褒めてますよね？」
えま「いや、でも…そのキスするとことかちょっと…」
はるな「そういえば、さっきの演技は抵抗しすぎだったかな。ちょっと恥らうぐらいでいいから」
えま「いや、ちょっとその…圧がすごくて…唇とかものすごく突き出してたり…」
ようこ「確かにすごい顔ではあったよね。笑っちゃいそうだったもん」
たけし「俺？あぁ、ごめんごめん。ちょっと盛り上がりすぎちゃってさぁ。次からは気をつけます。すんませんでした」
はるな「設定は十八だからね、しかもファーストだから。そこは大切にしてください」
たけし「わっかりました」
はるな「じゃあ、もう一回最初からやってみようか」
４人「はーい」
はるな「時間ないからテンポ上げていくよ。せーの、はい」

早送りで、キスの手前の場面まで演じる。続きをさっきよりもテンション上げて。

シンジ「お前と初めて会った時からずっと好きだったよ」

ミサキ「…だったら何でもっと早く言ってくれなかったの」
シンジ「仕方ないだろ。タイミング逃したの」
ミサキ「なにそれ、ばーか」
シンジ「なんだよ」
ミサキ「シンジ…」
シンジ「はい」
ミサキ「…好きだよ、ずっと大好きだった。これからもずっと…」
シンジ「ミサキ」

二人、いい雰囲気になる。

ミサキ「え、ちょっと…」
シンジ「なに」
ミサキ「やめてよ、こんなとこで」
シンジ「誰も見てないよ」
ミサキ「見てるよ、めっちゃこっち見てるから」
シンジ「いいじゃん、お互い好きなんだから」
ミサキ「そういう問題じゃ…ちょっと…」
シンジ「好きだ。ミサキ、好きなんだ」

もみあう二人。

えま「やっぱムリ」

えま、たけしを突き飛ばす。

はるな「ちょっとー。えま」
えま「すいません、ほんとすいません」
はるな「すごくいい感じだったのに。もったいない」
たけし「ほんと俺もさっきよりめっちゃ気持ち入った」
えま「すいません、ほんとすいません。でもやっぱキスはムリです。ほんと無理です。本当にすみません」
たけし「そんなに謝られると逆に辛いわ」
はるな「えー、別れ際のファーストキスは鉄板なのよ。そこが一番盛り上がるんだけど、どうにか出来ない？そうだ、シンジになんか被せようか。なんか覆面的なやつ。それならどう？」

たけし「シンジ、どんなやつなの」
　えま「すいません、それでもちょっと…」
たけし「うそでしょ」
はるな「えー、じゃあどうしようか」
ようこ「ねぇ、はるなちゃん」
はるな「なに」
ようこ「私が言うことじゃないかもだけど、台本をちょっと変えてあげたらどうかな？」
はるな「え、台本を」
ようこ「うん、ちょっとだけ。キスするところを抱きしめるだけにするとか。それなら、たけしくんのあの顔見なくていいし」
たけし「ようこさん」
　えま「それなら出来ると思います。あの顔さえ見なければ」
ようこ「ね、どうかな？」
はるな「ダメ。キスシーンは鉄板なの。考えてみてよ。両想いなのに彼が夢を追ってお別れするんだよ。絶対キスするでしょ。しなくてどうするの。あ、顔見なくていいならやっぱ覆面でもできるはずよね。ちょっとそれでやってみようか。昔の衣裳の中に覆面あったかも。ちょっと探してくるわ。かれんも手伝って」
かれん「あ、はーい」
　えま「いや、意味分かんなくなるんじゃ…」

はるな、かれん、部屋を出て行く。

　えま「どうしよ…」
ようこ「余計なこと言ったみたい。ごめんね」
　えま「ようこさんのせいじゃないですよ。ありがとうございます」
ようこ「はるなちゃん、ちょっと思い込みの激しいところがあるからねぇ…」
　えま「仕方ないですよね…あと一ヶ月しかないから…」
ようこ「まぁ、それも分かるんだけど」
たけし「あの…」
　二人「え」
たけし「何かごめんね、俺のせいで」
　えま「いやいや、本条さんのせいじゃないですよ。私に思いきりがなくて…」
たけし「こういうシチュエーション懐かしくてさ、ついつい盛り上がっちゃって…」
ようこ「どういうこと？」

たけし「いや、だからね、あったんですよ」
　えま「あった？」
たけし「そう、実際にあったの」
ようこ「このお芝居みたいなことが？」
たけし「そうそう。もう十年以上前だけど」
　えま「え、この台本、本条さんの実話なんですか？」
ようこ「あ、そうだったの？」
たけし「いや、細かいとこは違うよ。はるなちゃんに話したことないし。でも、台本もらったときビックリしたよ。うわ、俺だ俺だって」
　えま「へぇ、すごい偶然ですね」
ようこ「ねぇ、漫画みたい」
　えま「ですよね」
ようこ「それで、どうなったの？」
たけし「え？」
ようこ「この台本と同じようなことがあったんでしょ？」
たけし「はい」
ようこ「できたの？」
たけし「できた？」
ようこ「キスできたのかって」
　えま「あぁ…聞きたいような心底どうでもいいような…」
たけし「えまちゃんて意外と毒吐くね」
ようこ「それで？」
たけし「いや、それはもちろん」
　二人「もちろん？」
たけし「やってやりましたよ、十八ですから」
　二人「いやー、いやー」
たけし「なに」
　二人「なんかすごそう。想像したくない」
たけし「ありがとうございます」
ようこ「褒めてないから」
　えま「その子が頑張ったんだから、私も頑張らなきゃ」
ようこ「えまちゃん、それは違うから」
　えま「それで、その子とはどうなったんですか？」
たけし「え」
　えま「え」
ようこ「え」

たけし「聞いちゃう?それ聞いちゃうか。本当に聞きますか?オー、マジカー」
えま「あ、じゃあいいです」
ようこ「そうね、稽古しましょう」
たけし「待って」
二人「え」
たけし「聞いてください。ここまで聞いたら最後まで聞いていってください。お願いします。」
ようこ「しょーがないなぁ。はるなちゃんが戻ってくるから手短にね」
たけし「ありがとうございます。そんなに時間かかんないんで」
ようこ「では、どうぞ」
えま「あ、その子とはどうなったんですか」
たけし「もっと興味持て」
ようこ「えまちゃん」
えま「すいません。その子とはどうなったんですか」
たけし「付き合ったよ。だってお互いに片想いだと思ってたのがさ、まさかの両想いだったんだよ。すごくね。もうすごい盛り上がった。電車が出るときなんか泣いちゃってさ。で、周りの人がジロジロ見てくんの。なんだ、こいつらみたいな」
ようこ「まぁ、そうなるよね」
えま「ドン引きですよね」
たけし「そうなんだよ。今ならそう思うんだよ。でもその時は盛り上がっちゃってるからさ。逆にそういう視線が心地いいんだよ。俺たちは障害のある恋を選んでしまったんだみたいな。彼女も、ずっと待ってるからとか叫んじゃったり」
えま「うわ…誰も邪魔してないのに」
ようこ「後になってめちゃくちゃ恥ずかしくなるやつね」
えま「えーと…それで、その子とはどうなったんですか?」
ようこ「そうそれ。今も付き合ってるの?結婚とかは?」
たけし「別れたよ」
えま「え、そうなんですか?」
ようこ「どれぐらいで?」
たけし「二ヶ月」
二人「はやっ」
ようこ「あっさりしてるのね、十年以上も片想いだったのに」
たけし「いや、そうなんですけどね。あっという間にすれ違ったっていうか。こっちは夢を叶えるために稽古したり、オーディション受けたり、バイトかけもちしたり。彼女は進学したからあっちも忙しくなって。それでそのまま。まぁ、

よくある話ですよ」
ようこ「そっかぁ。始まりがねぇ、ドラマチックすぎたのかなぁ」
えま「その方が楽しそうですけどね」
ようこ「最初にピークがきたら後は落ちるだけだよ。そこまで盛り上がることなんて中々ないし。日常なんてマイナスの積み重ねみたいなもんだよね。ガッカリすることばっかり」
えま「あー、それ分かります。もう何のためにこんなことしてるのとか、誰のために我慢してるのかとか、分かんなくなります」
ようこ「えまちゃん、若いのに大変なのね」
えま「いや、私、そんなに…」
ようこ「まぁ、アレよね。たまにはサプライズとかしろってことよね」
えま「そうですよ。苦手だからとか言ってるヤツ、何なんですかね」
ようこ「大体さぁ、好きな人のために頑張れないとか終わってるよね」
えま「そうですよ、こっちには求めるだけ求めといて」
ようこ「えまちゃん、もう何か色々あるんでしょ。聞く、聞くよ。いっぱい聞くから」
えま「ありがとうございます。今度、飲みに行きましょう」
ようこ「もちろん」
たけし「もう俺の話はどうでもいいみたいですね…」
ようこ「あぁ、ごめんごめん。すっかり忘れてた」
えま「すいません」
ようこ「その子は今どこで何してるんだろうね」
えま「別れてからは一回も会ってないんですか？」
たけし「うん、会ってはない」
えま「会っては？」
ようこ「え、何したの？」
たけし「なんもしてないよ。いや、こんな時代だからさ？知りたくないこともいっぱい入ってくるじゃない。ＳＮＳとかさ」
ようこ「あぁ、それで」
えま「見たんですね」
たけし「幸せそうだったわ。結婚して子どももいてさ。女の子と男の子だって。彼女に似てかわいいんだよ」
ようこ「大丈夫？これ聞いても大丈夫なやつ？」
たけし「付き合った当時はさぁ、公務員なんてつまらないって言ってたのにさぁ。夢を追ってる人のほうが輝いてるとか言ってたのにさぁ」
えま「あまりつっこまない方が良さそうですね…」
ようこ「そうね」

たけし「でも、旦那は公務員なんすよ。めっちゃ金持ってるんすよ。旅行とかめちゃくちゃ行ってるんすよ。何でもない普段のランチにホテルとか行ってるし。腐るほど金持ってるんすよ。こっちはカップラーメンと牛丼の二択っすよ」
ようこ「(たけしに聞こえないように) 彼女の選択は正しかったよね」
えま「私もそう思います」
たけし「敵だ、やつらは敵だ」
ようこ「相当、未練があるようね」
たけし「いやいや、なに言ってるんすか、ようこさん。未練なんてそんなもん、これっぽっちも…あるわけない…じゃないですか…すんません。ちょっと、トイレ行ってきます」

たけし、部屋を出て行く。

えま「ちょっと涙目でしたね」
ようこ「どうしようか、はるなちゃんも帰って来ないし」
えま「このままじゃ稽古出来ませんよね…」
ようこ「仕方ないよね」
えま「え」
ようこ「いや、女はやっぱり現実を見ないと生きていけないよなぁって。夢追い人がかっこよく見える時期もあるけど。まぁ、でも女の基本は一緒なんだよね」
えま「でも、お金だけあってもむなしいもんですよ。なんか、それだけ与えてたらいいんだろって感じで。何様？って思います」
ようこ「そう？私はそっちのほうが嬉しい。お金の心配が多いと心もすさんじゃう」
えま「人それぞれなんですね」
ようこ「そういうこと」

はるなとかれんが戻ってくる。

はるな「なかったよ、覆面。どうしよう」
かれん「疲れたー。荷物多すぎですよ」
はるな「片付けなきゃとは思ってる」
ようこ「今回の公演が終わったら時間作ろう」
はるな「そうね。あー、でもどうしよう。覆面。誰か作れない？二時間ぐらいでパパッと出来ない？」
かれん「なんで覆面があると思ったんですか？」

はるな「昔、プロレスラーが出てくる芝居をやったの。舞台上をリングみたいにしてね。みんな、技とか練習して結構大変だったよ」
えま「ほぼプロレスですね」
はるな「で、その時に覆面の縫いかた？作りかた？みたいなのを調べてみんなで作ったんだ」
かれん「あ、じゃあ、はるなさん作れるんじゃないですか」
はるな「とっくに忘れたに決まってるでしょ。もう五年も前の話だもん」
えま「その時の劇団のメンバーはもういないんですか？」
はるな「うん、まあね。みんな辞めちゃった。最後の一人が辞めた後に、ようこさんが入団したの」
ようこ「そうだったね、私が入ったとき、はるなちゃん一人でやってたもんね」
はるな「そうだった。懐かしい」
ようこ「作りかた、どっかに残ってたらよかったのにね」
はるな「まさかもう一回使うとは思ってなかったから」
えま「…すみません」
はるな「謝らなくていいから。とにかく、どうにかしなきゃ。あれ？本条さんは？」
ようこ「あー、ちょっとトイレに…」
はるな「そう。戻ってきてから考えようか」
かれん「あのぅ…はるなさん」
はるな「え」
かれん「私、やります」
はるな「え、何を？」
かれん「ミサキ、やります」
三人「え」
はるな「何で？」
ようこ「かれんちゃん、スタッフでしょ」
かれん「でも、えまさんが大変そうだし、それにきっと出来ると思うんです、私」
はるな「いやいや、いくらやれば出来る子でも限度があるよ。台詞覚えるだけでも大変だし、公演まであと一ヶ月しかないし…分かった。思い出します、今から死ぬ気で思い出す。覆面の作りかた。だからちょっと待って」
ようこ「そうよ、早まらないで」
かれん「でも…」
えま「はるなさん」
はるな「え」
えま「私、やります」
はるな「できるの？」

えま「はい」
ようこ「大丈夫なの？」
えま「はい。かれんみたいな若い子を犠牲にするわけにはいきませんから。私が逃げそうになったらみんなで押さえてください」
はるな「分かった。じゃあ、本条さん戻ってきたら同じところからやろう」
三人「はい」
ようこ「本当に大丈夫？」
えま「はい、なんか出来ないままで終わるのも悔しいじゃないですか」
ようこ「でも相当ハードル高いよ」
えま「困難は乗り越えるためにあるんです」
ようこ「わかった、もう何も言わない。この目でしっかりと見届ける」
かれん「えまさん、かっこいい」
えま「ありがとう」

たけしが帰ってくる。

たけし「すんません。ちょっと腹が痛くなって…お待たせしました」
ようこ「来た」
はるな「遅いよ。待ってたんだから」
たけし「すんません。あれ、覆面は？」
かれん「結局、見つからなかったんです」
たけし「そうなんだ。じゃあ、どうするの？」
はるな「えまが覚悟を決めたの」
たけし「え」
えま「本条さん、さっきはすみませんでした。精一杯、相手役をやらせていただきます」
はるな「本当にいいのね？」
えま「はい、ミサキいきます」
はるな「じゃあ、さっきと同じとこからやります」
４人「はい」

駅のホームの場面になる。

シンジ「お前と初めて会った時からずっと好きだったよ」
ミサキ「…だったら何でもっと早く言ってくれなかったの」
シンジ「仕方ないだろ。タイミング逃したの」

ミサキ「なにそれ、ばーか」
シンジ「なんだよ」
ミサキ「シンジ…」
シンジ「はい」
ミサキ「…好きだよ、ずっと大好きだった。これからもずっと…」
シンジ「ミサキ」

二人、いい雰囲気になる。

ミサキ「え、ちょっと…」
シンジ「なに」
ミサキ「やめてよ、こんなとこで」
シンジ「誰も見てないよ」
ミサキ「見てるよ、めっちゃこっち見てるから」
シンジ「いいじゃん、お互い好きなんだから」
ミサキ「そういう問題じゃ…ちょっと…」
シンジ「好きだ。ミサキ、好きなんだ」

もみあう二人。

えま「はるなさん、お願いします」
はるな「分かった。ほら、ようこさんも」
ようこ「え、あぁ。えまちゃん、ごめん」

はるな、ようこ、抵抗するえまを押さえようとする。もみあう四人。

えま「やっぱムリ」

えま、三人をふっ飛ばす。

えま「ごめんなさい。偉そうに言ったのに…やっぱり私にはムリです。本当にすみません。私はやってもやっても出来ない子なんです」
ようこ「そんなことないよ、頑張ったよ。私、しっかり見たよ」
えま「ようこさん」

抱き合う二人。

かれん「やっぱり、私やってみます」
四人「え」
たけし「どういうこと」
かれん「本条さん、よろしくお願いします」
たけし「え、あぁ。よろしく」
かれん「さっきと同じとこからやりましょう」
たけし「あ、はい」

かれん、たけしの前に立ち演技をしようとする。

はるな「ちょっと待った」
四人「え」
はるな「書き直す」
四人「え」
はるな「今から台本を書き直す」
四人「今から？」
はるな「出来ないもんはしょうがない。でも、この話はキスシーンがないとダメなの。だから新しい台本を書く」
ようこ「え、でも公演までもう一ヶ月しかないよ」
はるな「三日。三日間、時間をちょうだい。それで書き上げるから。とりあえず、今日はもう稽古終了。今から書くから。それじゃ、お疲れ様でした」

はるな、別の部屋に行く。

えま「すみません」
ようこ「大丈夫だって。はるなちゃんを信じて待ちましょう」
たけし「今から台本書き直すって中々ないよな。本当に大丈夫かな」
えま「すみません」
ようこ「たけしくん」
たけし「そういうつもりじゃ…あ、俺バイトがあるんで先帰ります。お疲れ様でした」

たけし、部屋を出て行く。

かれん「私も帰りますね」
ようこ「あ、お疲れさま。気をつけてね」

かれん「ありがとうございます。あ、えまさん」
えま「ん、なに？」
かれん「私いつでも代わりやるんで言ってくださいね」
えま「え、あぁ…ありがとう」
かれん「お疲れ様でした」
二人「お疲れさま」

かれん、部屋を出て行く。

えま「意外とグイグイくる子だった」
ようこ「かれんちゃん、スタッフなのにね。どこで目覚めたんだろ」
えま「あの手のタイプは気をつけないと…」
ようこ「さ、私たちも帰ろうか」
えま「はい、あの…ようこさん」
ようこ「なに？」
えま「よかったら、飲みに行きませんか？」
ようこ「もちろん。行こ行こ。焼き鳥食べたい」
えま「やった。行きましょう」

二人、部屋を出て行く。

暗転

二場

はるな、別の部屋から出てくる。イライラした様子で部屋を歩き回る。

はるな「どうする？全然出てこないんだけど。私の頭ん中、これで限界なの？めちゃくちゃからっぽなんですけど。三日で書くって言っちゃったじゃん。何であんなこと言ったんだろ。あー、もう。てか、今、何時？うそ、もうこんな時間…あー、もうどうしよう。クソが」

はるな、部屋の中を走り回ったり、ゴロゴロ転がったりする。

はるな「アイデア出すときは、身体動かすといいって誰か言ってたよ。ほら、出て来い出て来い出てこい」

はるな、疲れて横たわる。

はるな「疲れた…疲れたよ。疲れただけだったよー。何も出てこないよー。あ、ちょっと待って。今、なんか…あ、来たかも。あ、来た来た来た」

はるな、別の部屋に行く。

じゅんいちが部屋に入って来る。突然、発声練習を始める。

じゅんいち「ア、エ、イ、ウ、エ、オ、ア、オ、カ、ケ、キ、ク、ケ、コ、カ、コ。なんだ、まだまだいけるかもな。サ、セ、シ、ス、セ、ソ、サ、ソ…」

じゅんいち、発声を続ける。はるなが別の部屋から出てくる。

はるな「だれ？本条さん？稽古は明日からだって…」

じゅんいち「おぅ、久しぶり」

はるな「え、なに？どうしたの？急に。何やってんの？」

じゅんいち「いや、最近どうしてるかなと思って。ほら、近くまで来て明かりが点いてたから。な」

はるな「どうって別に。てか、何でいま発声練習してたの？」

じゅんいち「ん、いや、劇団の練習ってこういうことするんだろ？」

はるな「まぁ、そうだけど。何の説明にもなってないけど」

じゅんいち「まぁまぁ、それで、どうなんだ？最近」
はるな「どうって…普通だよ」
じゅんいち「そうか、普通か」
はるな「…なに？用がないなら帰ってよ。今、忙しいから」
じゅんいち「そうか、忙しいか」
はるな「台本書かなきゃいけないの。集中したいから」
じゅんいち「そうか、台本書くのか」
はるな「だから用がないんだったら」
じゅんいち「いや、まぁ、用はあるんだ」
はるな「だから、なに？」
じゅんいち「あー…最近、劇団のほうは順調なのか？」
はるな「え、まぁね…前よりは人も増えたし、今は公演も打ててるし」
じゅんいち「そうか、良かったな」
はるな「うん…」
じゅんいち「うん…」
はるな「…」
じゅんいち「…」
はるな「…だから、なに？娘にこんなこと言われたくないと思うけど、そんなんだからお母さん出て行っちゃうんだよ」
じゅんいち「おいおい、それは言わない約束だろ」
はるな「悪いけど、公演のために台本書かなきゃいけないの。ほんと集中したいから。用がないなら…」
じゅんいち「お前はいつまでプロを目指すんだ？」
はるな「また、そのこと…」
じゅんいち「お前が出て行って、もうずいぶんになるよな」
はるな「分かった。その話はまた時間のある時にゆっくりする。今はほんとやらなきゃいけないことがあるの」
じゅんいち「そろそろ諦めてもいいんじゃないかと思ってるんだ。お前ももう十分、挑戦しただろう？」
はるな「なに？もう十分って？なんでそんなこと言われなきゃいけないの？なんで他人に判断してもわなきゃいけないの？私のやりたいことを」
じゅんいち「おいおい、他人って言い方はないだろう。家族なんだから」
はるな「尚更でしょ。家族ならなんで応援できないの？なんで娘の夢を後押ししてやれないのよ」
じゅんいち「なに言ってるんだ、応援ならしてるだろう。生活費の援助をしてやってるし、今だってこうしてここを貸してやってるんだから」

はるな「それはそうだけど…」
じゅんいち「不満なら出て行きなさい」
はるな「…」
じゅんいち「私はお前のためを思って言ってるんだ。お前ももう二十六だろう。このままずるずる夢を追ったってどうにもならないんじゃないか？」
はるな「そんなことない。今度の公演はオーディションも兼ねてる。審査員の評価がよかったら、とうとうプロになれるんだって。大体、二十六なんてまだまだ若いんだから」
じゅんいち「そうか、じゃあその公演でなれなかったらもう諦めなさい」
はるな「え」
じゅんいち「別に演劇を辞めろと言ってるわけじゃないんだぞ。ただ、これからは趣味でもいいんじゃないかって言ってるんだ。普通に仕事や結婚をして子どもを産んで、普通に生きていく。それだって大切なことだぞ」
はるな「…」
じゅんいち「今のお前はつまらない生活だと思うかも知れないけど、それはそれで大変だ。自由に生きてきた分、出遅れてるんだから」
はるな「…諦めきれなかったら…？」
じゅんいち「その時はお前の人生だ、好きに生きなさい。ただ、これ以上、援助をするつもりはないし、ここからも出て行ってもらう」
はるな「…」
じゅんいち「それも大変だぞ。稽古する場所を探さないといけないし、バイトももっと増やさないといけない。お前が思ってるより大変になる」
はるな「そんなこと分かってる…とりあえず、今日は帰って」
じゅんいち「あぁ、ちょっとトイレだけ行っていいか。すぐ帰るから」

じゅんいち、部屋を出て行く。

はるな「…」

ようこが部屋に入って来る。

ようこ「あ、はるなちゃん」
はるな「ようこさん」
ようこ「調子はどう？進んでる？」
はるな「今、ちょっと休憩してたとこ」
ようこ「そう。丁度良かった。差し入れ持ってきたんだ。一緒に食べよう」

はるな「ありがとう」
ようこ「ごめんね、私が余計なこと言ったから」
はるな「そんなことないよ。ちょっとどうなのかなって思ってたんだ。この話、本当に面白いのかなって。みんなさ、優しいから言わないでしょ。気遣わせてるんだろうなって」
ようこ「何言ってんの。私たちは、はるなちゃんが面白いと思ったものをもっと面白くするために頑張ってるの。本当に嫌ならとっくに辞めてるよ」
はるな「…うん」
ようこ「さ、とりあえず食べよ食べよ」
はるな「うん」

じゅんいちが部屋に戻ってくる。

じゅんいち「あ、こんばんは」
ようこ「…こんばんは。この人は？」
はるな「あー…ここの稽古場を貸してくれてる人。オーナーさん」
ようこ「え、そうなの。はじめまして、小野ヨーコです。いつもお世話になってます」
じゅんいち「あー、いえいえ。こちらこそ、いつも娘がお世話になって…」
ようこ「え」
はるな「じゅんいちさん」
二人「え」
はるな「オーナーのじゅんいちさん」
じゅんいち「あ…じゅんいちです。よろしくお願いします」
ようこ「いえ、こちらこそよろしくお願いします。あ、じゃあ折角なんで一緒に食べましょう。たくさん買ってきたんで」
じゅんいち「あ、はぁ…」
ようこ「そうだ。私、何か飲むもの入れてきますね。コーヒーとかあったよね？」
はるな「いや、もう大丈夫だから…」

ようこ、部屋を出て行く。

はるな「言わないでよ」
じゅんいち「え」
はるな「絶対言わないで」
じゅんいち「何を？」

はるな「あなたとのこと」
じゅんいち「え」
はるな「言ってないから。みんなに」
じゅんいち「なんだ、いいじゃないか、それくらい」
はるな「嫌なの。ハッキリ言えないけど、それだけは絶対嫌なの」
じゅんいち「…」
はるな「よろしくお願いします」
じゅんいち「あぁ…分かった」

ようこが戻ってくる。

ようこ「ごめん。なんかあると思ったのに、なんも無かったよ」
はるな「そう」
ようこ「私、ちょっとそこまで行って買ってくるね」

ようこ、部屋を出て行こうとする。

じゅんいち「あ、いえ、お構いなく」
はるな「ようこさん、本当にもう大丈夫だから。ありがとう」
ようこ「そう？すみません、気が付かなくて。とりあえず、食べましょう」

みんなで差し入れのお菓子を食べる。

ようこ「あの…」
じゅんいち「え」
ようこ「昔、どこかでお会いしたことありませんか？」
はるな「え」
ようこ「何だか初めて会った気がしなくて…」
じゅんいち「…いや、失礼ですが、おそらく他人の空似だと思いますよ」
ようこ「あ、そうですよね」
じゅんいち「あなたみたいなきれいな女性にお会いしたら、忘れることはないと思います」
ようこ「そんなこと言われたの初めてです」
じゅんいち「本当ですか？もったいない」
ようこ「いえいえ、そんな…」
はるな「お時間、大丈夫ですか？」

じゅんいち「え」
はるな「お忙しいんでしたよね？たしか」
じゅんいち「あー…そうでした。じゃあ、頑張ってください。失礼します」
ようこ「あ、ありがとうございます。頑張ります」
じゅんいち「それじゃ」

じゅんいち、部屋を出て行く。

ようこ「絶対、会ったことあると思うんだけどな。オーナーさん、名字なんていうの？」
はるな「あー…何だったかな…ちょっと忘れちゃった」
ようこ「えー、管理人さんの名前忘れたりする？」
はるな「ちょっと変わった人だったの。なんか名字では呼ばないでくれって。親しみを込めて名前で呼んでほしいんだって」
ようこ「へぇー…変わってる」
はるな「うん、変わってる。それにちょっと気持ちわるいでしょ。変になれなれしいし。でも、あまりつっ込まないほうがいいかなと思って」
ようこ「確かにちょっと軽い感じはした。そうだね。なんか変なスイッチ入ったら嫌だもんね」
はるな「そうそう」
ようこ「…娘がお世話にって言ってたよね？」
はるな「え、あぁ…ずっと前の話。ようこさんが入団する前の話」
ようこ「そうなの？でもなんか今もいるみたいな言い方だったけど」
はるな「それは…」
ようこ「うちの劇団だったらみんな、娘でもおかしくないよね。えまちゃんもかれんちゃんも。あ、はるなちゃんも」
はるな「…」
ようこ「明日、稽古で会うから聞いてみよう」
はるな「…(急に泣き出す)」
ようこ「はるなちゃん？」
はるな「…かわいそうな人なの」
ようこ「え」
はるな「じゅんいちさんはとてもかわいそうな人なの」
ようこ「どういうこと？」

はるな「ケンカして、娘さんがね、出て行っちゃったの。それがショックで受け入れられなくて、まだここに居ると思ってしまってるの。もうとっくに辞めてしまったのに…だからたまにああやって様子を見に来てしまうの」

ようこ「そうなの？そんなの辛すぎるよ。見た目は普通だったのに…色々大変なんだね」

はるな「あの人をそっとしておいてあげて。お願い」

ようこ「うん、分かった」

はるな「ありがとう。それはそうと、さっき台本の案が浮かんで冒頭だけ書いてみたんだ。ちょっと見てもらってもいい？」

ようこ「うん。私で良ければ」

はるな「助かるー。台本取ってくる」

ようこ「はーい」

はるな、別の部屋に行く。

ようこ「…絶対、見たことあるんだけどなぁ」

場面転換

三場

部屋の中。テーブルの前にトキコ（ようこ）が座っている。

トキコ「本当にもう…いつも遅いんだから。どんなことやってるのかしら。本当に」

リンカ（かれん）が入って来る。

リンカ「ただいまー。あー、疲れた」
トキコ「あら、リンカちゃん、おかえり。今日も遅かったのね」
リンカ「うん。毎日、残業。忙しすぎるんだよ」
トキコ「頑張りすぎて身体壊さないようにね。ごはんは？」
リンカ「あー、もう外で食べてきた」
トキコ「あらそう」
リンカ「ごめん、連絡してなかった」
トキコ「いいの、いいの。私が作ったわけじゃないし」
リンカ「あ、ならいっか」
トキコ「そうそう」
リンカ「ヨシノリは？」
トキコ「ヨシくんもね、今日は残業だって。うちの子はみんな働き者で、ちょっと心配だわ」
リンカ「そうじゃない子もいるけどねー」
トキコ「だって、あの子はほら、別にうちの子じゃないから」
リンカ「まあ、それもそっか」
トキコ「今日もまた遅いのよ」
リンカ「え、まだ帰って来てないの」
トキコ「そうなのよ」
リンカ「なにやってるんだっけ？」
トキコ「なんだったっけ…なんか演劇とかって」
リンカ「演劇？なにそれ。高校生とかがやるやつじゃないの」
トキコ「そうなの？よく知らないんだけどね」
リンカ「ふーん」
トキコ「仕事もしてないのに、いい気なもんよね」
リンカ「ヨシノリが医者だからでしょ」
トキコ「何が良かったのかしら、本当に」

ユキノ（えま）が入って来る。

ユキノ「ただいま帰りました」
トキコ「おかえりなさい」
ユキノ「ヨシノリさんは？」
トキコ「まだよ」
ユキノ「そうですか。（リンカに）ごはん、もう食べましたか？」
リンカ「あー、あたし今日外で食べてきたから」
ユキノ「そうですか。じゃあ、お義姉さんの分、ヨシノリさんが帰って来たら一緒にいただきます」
リンカ「どうぞ」
トキコ「ねぇ、ユキノさん」
ユキノ「なんですか？」
トキコ「どうしてこんなに毎日遅いの？」
ユキノ「あ、今は本番が近くて…すみません…」
トキコ「別にいいのよ。あなたがどんな趣味を持ってようが、そんなことはどうでもいいの」
ユキノ「…趣味…」
トキコ「そう。趣味を楽しむのはいいんだけど」
リンカ「ヨシノリが医者でよかったよね。お金無かったらさ、結婚したってそんな好きなこと出来なかったもん。これが勝ち組ってやつよね」
トキコ「ほんとほんと」
ユキノ「えぇ…それは感謝してます」
リンカ「演劇やってるんでしょ？」
ユキノ「はい」
リンカ「なんで？昔からやってんの？」
ユキノ「いえ、大人になってから。ヨシノリさんと付き合う前からですけど」
トキコ「あの子、何にも言わないから。後から知ってびっくりしちゃった」
リンカ「ねぇ。周りでいないよね。演劇なんてやってる子」
トキコ「私も聞いたことないわ」
ユキノ「そうですか」
リンカ「なんでやろうと思ったの？」
ユキノ「あー、なんとなく…」
リンカ「えー、ああいうのって何となくで出来るの？なんかさこう、ハァァー(ミュージカル風)とかするんでしょ？」
トキコ「ちょっと、やだそれ。ハァァーって」

二人「ハァァー」
ユキノ「あ、そういうんじゃ。ミュージカルとかじゃないんで」
リンカ「え、そういうんじゃないの？どんなのやってるの？」
ユキノ「えっと、普通の…」
リンカ「普通のってどんなの？」
トキコ「テレビドラマみたいなの？」
ユキノ「あ、ちょっと違うんですけど」
リンカ「どんなのやってるの？ちょっと見せてよ」
トキコ「あ、見たい見たい」
ユキノ「え、そう言われても…」
二人「見たい、見たい、見たい」
ユキノ「えっと…」
二人「見たい、見たい、見たい」
ユキノ「分かりました。じゃあ…」

ユキノが芝居をしようとすると、ヨシノリ（たけし）が入って来る。

ヨシノリ「ただいま」
トキコ「あら、おかえり」
リンカ「おかえり」
ユキノ「おかえりなさい」
ヨシノリ「なにやってるの？」
トキコ「なにって？別になにもやってないわよ」
リンカ「そーそー」
ヨシノリ「そう」
ユキノ「ヨシノリさん」
ヨシノリ「なに」
ユキノ「ごはん、まだでしょ？一緒に食べよう」
ヨシノリ「あぁ。今日はなに？」
ユキノ「唐揚げ」
ヨシノリ「そう」
トキコ「こんな時間に？唐揚げ？ダメよ。ねぇ、ヨシくん、肉じゃがにしよっか」
ユキノ「え、でも私、今日、出かける前に唐揚げ作っていきましたよね？」
トキコ「そうだけどね。こんなこともあろうかと思って私も作ってたの。ほら、栄養が偏ったらかわいそうでしょ？」
ユキノ「そんな。別に今日じゃなくてもいいじゃないですか。わざわざ…」

トキコ「わざわざ?わざわざ私が嫁に嫌味を言うためにわざと作ったっていうの?そんなひどいことするわけないでしょ」
リンカ「あーあ、ママ怒っちゃったよー」
ユキノ「でも…」
トキコ「私はね、自分の子どもが心配なの。毎日毎日、人様を助けて疲れてるの、命を扱う仕事なの。なるべく身体に良いものをって思うのは、母親として当然の気持ちでしょ」
ユキノ「でもそれなら明日でもいいんじゃないですか?ヨシノリさん、一緒に唐揚げ食べよう」
トキコ「ダメよ。絶対、肉じゃが」
ユキノ「唐揚げ」
トキコ「肉じゃが」
ユキノ「唐揚げ」
トキコ「肉じゃが」
リンカ「お風呂入ろうっと」

リンカ、部屋を出て行く（出て行く動き。かれんに戻って、芝居を横から見ている）

ヨシノリ「肉じゃが」
二人「え」
ヨシノリ「ママの肉じゃが食べるよ」
ユキノ「え…」
トキコ「やっぱり、ヨシくんはママの子ね。親の愛情が伝わらないなんてあるわけないわ。待っててね、すぐ準備するから」

トキコ、部屋を出て行こうとして、

トキコ「あなたって何のために居るのかしらね。仕事もしてないし、孫の顔を見せるわけでもない。何のために結婚させたのか分からないわ」

トキコ、部屋を出て行く(出て行く動き。ようこに戻って、芝居を横から見ている)

ユキノ「…なんで…」
ヨシノリ「え」
ユキノ「なんで、肉じゃが選んだの」
ヨシノリ「いやだって、ママがせっかく作ってくれたし…」

ユキノ「私だって唐揚げ作った。それなのに」
ヨシノリ「この時間から揚げ物はちょっと重たいんだよ。僕の帰る時間くらい考えてくれよ。それに…君はあまり料理得意じゃないだろ」
ユキノ「そうよ、得意じゃない。でも頑張って作ってるの。なのに何で…」
ヨシノリ「だってママのごはんのほうがおいしいから」
ユキノ「はぁ。なにそれ」
ヨシノリ「生活できる金は渡してるんだから、もっと頑張ってくれよ。遊んでばかりいないでさ」
ユキノ「家事はちゃんとしてるでしょ。そりゃ完璧じゃないかもしれないけど」
ヨシノリ「趣味にかける時間が多すぎるんじゃないの」
ユキノ「なんでそんなこと言うの。お芝居は私にとって趣味じゃないよ。人から見たら遊んでるように見えるかもしれないけど真剣にやってるの」
ヨシノリ「でも金になるわけじゃないだろ。ましてやプロになるわけでもないのに」
ユキノ「お金にならなかったら何の意味もないの？プロになれなかったら続けちゃいけないの？私が舞台に立ってる姿が好きだって言ってくれたじゃない」
ヨシノリ「限度があるだろ。ママみたいにさ、もっとちゃんとしてくれよ」

ようこ「この男、ほんとムカつく」
はるな「私も書いてて殴りたくなった。あー、結婚したらこんなこと言われるのかなぁ。お義母さまを褒めたりしなきゃいけないのかぁ」
ようこ「だとしたら、結婚なんてしなくていいわ。耐えられない」
はるな「まぁ、相手いないけどね」
ようこ「あー、あー、あー」

ユキノ、ヨシノリ、びっくりする。

ようこ「ごめん、ごめん、ごめん」
はるな「続けて続けて」

ユキノ「ママ、ママって。私とママとどっちが大切なのよ」
ヨシノリ「それは…」
ユキノ「それは…」
ヨシノリ「それは…」
ユキノ「もう、ハッキリしてよ」
ヨシノリ「うぅ…ママー」

ヨシノリ、部屋を出て行く(出て行く動き。たけしに戻って芝居を横から見ている)

ユキノ「ちょっと…」

たけし「こんなマザコン男、本当にいます？」
はるな「分かんない。でもいてもおかしくないでしょ？」
ようこ「味方がいないって辛いよね」
はるな「…そうだね」
ようこ「ＤＶとかするタイプだね、絶対」
たけし「こわっ。俺は絶対やりませんよ、そんなこと」

ユキノ「好きなことがあるってだけで、なんであんなこと言われなきゃいけないの？あんな甘すぎてグズグズの肉じゃが作れなきゃいけないの？結婚してもフルタイムで働かないといけないの？子どもはすぐ産まなきゃいけないの？それ全部やらなきゃ存在も認めてもらえないの？バカじゃないの、いい加減にしてよ」

たけし「なんか魂の叫びですね」
ようこ「この前の台本と雰囲気違うね。はるなちゃん、なんかあったの？」
はるな「んー…なんもないよ。とりあえず、今出来てるのはここまでだから急いで続き書く」
ようこ「どうなるか楽しみ」
たけし「ヨシノリ、もっかい出してくださいね」
はるな「あー、多分ね」
ようこ「そういえば、かれんちゃんの台詞増えてるよね。え、スタッフだよね」
かれん「フフフ」
えま「金だけ渡してたら何でも言うこと聞くと思うな。お前のママじゃねえんだよ」
全員「え」
えま「なんで。なんで私の味方してくれないの。それが同居の条件だったじゃん。なんで気付いたら味方いなくなってんの。なんで？え、どうなってんの？え、はめられたの？」
ようこ「えまちゃん？」
えま「あんなにさぁ、調子のいいことばっか言ってたじゃん。君のことは一生守るとか言ってたよね？結婚したら無かったことにしてもいいの？実家で親に頼りっぱなしだったくせに、人の家事にケチつけんなよ。だったらお前がやれよ」

たけし「えまちゃん…こんな子だったっけ…？」
えま「はーい、お義母さま。栄養は大事でございます。でもハンバーガー食べても急に死ぬわけじゃない。同じ、同じでございます。たまに夜中に唐揚げ食べても死ぬわけじゃないでしょ。同じでございます。肉じゃが食べて、ハイ、健康になりました。なんて人いる？いるならここに連れてこいよ。もうほんとバカばっかり。クソが」
はるな「ちょっとストップ」
はるな、芝居を止める。

えま「あ…」
ようこ「魂の叫びだったね…」
たけし「新たな一面を見た…」
えま「あ…すみません…わたし…」
はるな「アドリブ？そういうこと出来るようになったんだ」
かれん「えまさん、かっこいい」
えま「いや…アドリブっていうか…」
はるな「考えずに出来たの？すごいじゃん」
えま「違うんです。その…勝手に盛り上がって…ただの私の愚痴なんです」
ようこ「どういうこと？」
えま「新しくもらった台本の役、自分のことかと思うくらい私に似てて」
たけし「こんな男、本当にいるんだ」
はるな「え、ちょっと待って。えまって結婚してたの？」
えま「はい。あれ？言ってませんでしたっけ？」
はるな「聞いてない」
ようこ「ごめん、私は知ってた」
たけし「そうなんすか？」
はるな「そうなの？」
ようこ「この前、飲みに行った時に聞いたの。ほんと最近なんだけど。でもこんな悩んでるのは知らなかった」
えま「マジで旦那、こんな感じなんです。旦那のお母さんもこんなの。お芝居やってるの反対されちゃってて。ちょっとどうしたらいいか分かんなくなってて」
ようこ「もう、もっと言ってよ。そういうの、私も気持ち解るから」
たけし「そうなんすか？」
ようこ「え、いや、私の話はとりあえずいいから」

はるな「反対されてるんだ」
えま「はい…趣味なんだから程々にして、いいかげん孫の顔でも見せろって」
ようこ「そう言われちゃうよね…でもそういう問題じゃないんだよね」
えま「私、お芝居続けたいんです。この劇団でやっていきたいんです。今度の公演で頑張ればもっと道が開ける。認めてもらえると思うんです。でも私が本気なことも、みんなが本気なことも周りには伝わらないんです。少なくとも私の周りには…」
たけし「それ、キツイよなぁ…」
ようこ「うん…」
えま「…台本に無いこと言って、すみませんでした」
はるな「もう一回やってみよう」
えま「え」
はるな「さっきのユキノの台詞、すごく良かった。きっとえまは苦しいよね。すごくすごく苦しんでるよね。でもだからこそ、さっきの台詞が出てきたんだよ。活きた台詞だよ。もう一回やって、その流れで台本作っていこう」
ようこ「うー、面白そう」
たけし「いいっすね、なんか芝居作ってるって感じです」
はるな「私ももっと頑張りたいって思ってる。いい年して夢みるとかバカみたいって言われるだろうけど、でも諦めたくないよね。私、もっとみんなで演劇やりたいの。今度の公演、絶対成功させたいの。だからお願い。協力してください」
ようこ「当たり前でしょ。私はどこまでもついていくよー」
たけし「俺も俺も。ここで引くわけにはいかねえよ」
かれん「私ももっと頑張ります」
はるな「家族に認めてもらえないのはほんとに辛いよね。でも伝わらなかったらさ、意地でも解らせてやりたいよね。なにが何でも納得させてやりたいよね」
えま「はい」
はるな「もう一回やってみよう」
全員「はい」

演技を始めようとすると、稽古場の入口のほうからガタッと音がする。

かれん「誰ですか？」

じゅんいちが入って来る。

じゅんいち「あ、すみません。お邪魔してしまったみたいで…」
ようこ「あ、どうもー」
じゅんいち「あ、どうも」
たけし「誰っすか？」
ようこ「オーナーさん。ここの稽古場の」
えま「そうなんですか」
たけし「はじめまして。本条です」
えま「はじめまして。御法川です」
かれん「相沢かれんです」
じゅんいち「あ、はじめまして。いつも娘が…」
はるな「じゅんいちさん」
たけし「え」
ようこ「じゅんいちさん」
えま「え」
じゅんいち「…はじめまして、じゅんいちです」
たけし「いきなり、名前呼びっすか。フレンドリー」
ようこ「そこには触れないで。お願いだから」
たけし「あ…はぁ…」
えま「なんか訳ありっぽいですね」
ようこ「触れないで」
えま「…分かりました」
はるな「それで…どうされたんですか、今日は」
じゅんいち「あぁ、いや見学してもいいですか？」
はるな「え」
じゅんいち「稽古、見学させてもらってもいいですか？」
たけし「おぉー、お客さんだ」
えま「緊張しますね」
はるな「はい。それは構いませんけど…」
じゅんいち「ありがとう。私のことは気になさらずに続けてくださいね」
かれん「あ、こっちどうぞ」
じゅんいち「すみません」
はるな「えっと、じゃあさっきのとこからもう一回やってみよっか。緊張しなくていいから。いつも通りで」
えま「はい」
はるな「じゃあ、お願いします」
全員「はい」

劇中劇の続きを始める。

ユキノ「好きなことがあるってだけで、なんであんなこと言われなきゃいけないの？あんな甘すぎてグズグズの肉じゃが作れなきゃいけないの？結婚してもフルタイムで働かないといけないの？子どもはすぐ産まなきゃいけないの？それ全部やらなきゃ存在も認めてもらえないの？バカじゃないの、いい加減にしてよ」

はるな「はい、ストップ」

じゅんいち「…」

はるな「さっきより硬くなってる。もっとユキノの気持ちで台詞を喋っていいから。無理に怒ろうとしなくていいから」

えま「はい」

はるな「もう一回やってみよう」

えま「はい」

はるな「せーの、はい」

ユキノ「好きなことがあるってだけで、なんであんなこと言われなきゃいけないの？あんな甘すぎてグズグズの肉じゃが作れなきゃいけないの？結婚してもフルタイムで働かないといけないの？子どもはすぐ産まなきゃいけないの？それ全部やらなきゃ存在も認めてもらえないの？バカじゃないの、いい加減にしてよ」

はるな「ストップ」

じゅんいち「…」

えま「すみません」

はるな「最初のが一番良かった。もっと新鮮な気持ちで」

えま「はい」

はるな「もう一回。せーの、はい」

ユキノ「好きなことがあるってだけで、なんであんなこと言われなきゃいけないの？あんな甘すぎてグズグズの肉じゃが作れなきゃいけないの？結婚してもフルタイムで働かないといけないの？」

じゅんいち「ストップ」

じゅんいち、芝居を止める。

全員「え」

はるな「ちょっと、何ですか急に」

じゅんいち「弱いな…」

はるな「え」
じゅんいち「今の演技じゃ何も伝わってこない」
えま「…すみません」
はるな「ちょっと勝手なことしないで…ください」
じゅんいち「御法川さんは大切にしたいものはありますか？」
えま「はい、一応あります…」
じゅんいち「一応じゃダメなんだよ、一応じゃ」
たけし「え、急に？」
ようこ「まずい。スイッチ入った」
じゅんいち「いいか、演技ってのは生き物なんだよ。その時その時、同じようで違う感情が流れてるんだよ。いいか、大切にしたいものが無いならさっきの台詞はははけないよ」
えま「すみません…」
かれん「すごくあつーい」
じゅんいち「そうだ。ちょっとみんなで羽交い絞めにしてみようか。抑圧された感情、そこから抜け出すというエネルギー、それを肌で感じてみよう。うん、その方が早い」
はるな「ちょっと、いい加減に…」
じゅんいち「さぁ、手伝って」
たけし「え、はい」

えまを羽交い絞めにする（はるな以外）

ようこ「え、かれんちゃんも？」
かれん「なんか楽しそうなんで」
じゅんいち「よし、じゃあさっきの台詞から」
全員「はい」

ユキノ「好きなことがあるってだけで、なんであんなこと言われなきゃいけないの？」
じゅんいち「もっと強く」
ユキノ「あんな甘すぎてグズグズの肉じゃが作れなきゃいけないの？結婚してもフルタイムで働かないといけないの？」
たけし「すごい。パワーが上がってきてる」
じゅんいち「幸せってなんだ、君にとっての幸せってなんだ」

ユキノ「子どもはすぐ産まなきゃいけないの？それ全部やらなきゃ存在も認めてもらえないの？」
ようこ「そんなことない。そんなことないよ」
じゅんいち「いいぞ。そのまま思いっきり自分を解放して」
全員「バカじゃないの、いい加減にしてよ」

全員、放心状態になる（はるな以外）

たけし「…なんかやり切ったって感じがしますね」
ようこ「うん、久々に燃えたわ…あー、のど乾いた」
かれん「演劇ってすごく熱いんですね」
じゅんいち「いや、みなさんのいい演技を見せてもらいましたよ。とても幸せな気持ちになりました。ありがとうございます。でも忘れないでください。ここがスタートだということを」
えま「はい、ありがとうございます」
じゅんいち「これからも頑張って」
全員「はい」

全員、じゅんいちと握手をする（はるな以外）

じゅんいち「じゃあ続きを」
はるな「…ちょっと待って。ちょっと待ってよ。何してくれてんの？いきなり来てさ、なにこの感じ。なんか一つになったみたいな」
ようこ「はるなちゃん」
はるな「お願いだから邪魔しないでください。ここは私の劇団なの。私が演出なの。お芝居のことも知らないくせに、偉そうに言わないで。迷惑だって分からないの？」
じゅんいち「あぁ…すみません。つい…」
ようこ「はるなちゃん、そこまで言わなくても…」
はるな「…」
たけし「いや…でもでも、じゅんいちさんがアドバイスしてくれたお陰で、芝居ちょっと良くなりましたよね。いや、はるなちゃんと比べてどうとかじゃなくて」
えま「私も少しだけ感覚つかめた気がします。もっとやれそうな気がします」
はるな「だったらさ、この人と一緒にやったらいいじゃん。こんなヘラヘラして訳分かんない人とさ、いい芝居作れると思うならやったらいいじゃん」

ようこ「誰も思ってないよ、そんなこと」
じゅんいち「すみません、私が余計なことをしたばっかりに」
たけし「いやいや、そんな…」
はるな「そう、ほんとそう。分かってやってるんでしょ？なんかひどいよね。こんなやり方しなくてもいいのに」
えま「え、どういうことですか…」
じゅんいち「いや…なんでも…」
はるな「諦めない。絶対諦めないから。あんたの思い通りになんか絶対ならないから。もう帰ってよ」
たけし「どういうこと？話が全く見えねえ」
ようこ「はるなちゃん、ちょっと落ち着こう」
じゅんいち「…稽古の邪魔をして、すみませんでした。これで失礼します」
たけし「え、ちょっと…」

じゅんいち、部屋を出て行く。

はるな「…」
たけし「…」
えま「…」
ようこ「…あ」
かれん「あ？」
えま「え？」
たけし「え？」
ようこ「え？」
えま「え？」
ようこ「え？」
たけし「え？」
ようこ「なに？」
たけし「いやいや、ようこさんが最初に言ったんすよ」
ようこ「え、そうだっけ？」
かれん「そうですよ」
えま「どうかしたんですか？」
ようこ「いや、違うの。思い出したのよ」
たけし「なにを？」
ようこ「じゅんいちさん」
えま「じゅんいちさん？」

はるな「…」
かれん「知り合いだったんですか？」
ようこ「違うの、なんか見たことあるなって思ってたんだけどね。今、思い出したんだよ」
はるな「…」
えま「誰なんですか？」
ようこ「昔、好きだった劇団の俳優さん」
全員「え」
たけし「そうだったんすか？」
ようこ「驚きでしょ」
えま「なんて劇団ですか？」
ようこ「〇〇〇〇〇」
えま「え」
ようこ「知らない？」
えま「はい…」
たけし「俺も聞いたことない」
ようこ「そっかぁ。まぁ、しょうがないよねぇ。もう二十年ぐらい前の話だし」
たけし「え、そんな前の？ようこさん、いくつなんすか？」
ようこ「たけしくん、ちょっと黙ろうか」
たけし「…はい」
かれん「私、まだ産まれてないです」
ようこ「それ言わなくていいやつ」
えま「プロの劇団だったんですか？」
ようこ「多分。プロはプロだけど、バイトとかしてたっぽい」
えま「そうなんですね」
たけし「まぁ、そうっすよねぇ。それ一本で食っていこうと思ったら、みんなが知ってるくらいじゃないと」
かれん「厳しい世界なんですねぇ」
はるな「それで…」
ようこ「ん？」
はるな「それであの人、どうなったの？」
ようこ「あぁ。それが突然退団しちゃってさ。なんか結婚したとかって聞いた気がする。いや、離婚したんだったかな…理由ははっきり分かんないんだけど」
たけし「そこまで知ってるだけでもすごいっすよ」
ようこ「ふふふ、ファンの情報網をなめないでよ。結構好きだったんだけどなぁ。あの劇団」

えま「よくその人だって分かりましたね」
ようこ「雰囲気は変わってなかったからね。かなり老けてたけど」
かれん「そうなんですか？」
ようこ「そうだよ。昔はもっとかわいかったんだから。今はあんなんだけどね」
はるな「…」
たけし「それっきり舞台には出てないんすか？」
ようこ「そう。最初はテレビとかに出るようになったのかなと思ったんだけど、それもないし、別の劇団に出るわけでもないし。知られざる電撃引退」
たけし「それが二十年後の再会でしょ？偶然こわい」
かれん「そういうこともあるんですねぇ」
えま「なんか台本になりそう」
はるな「…」
ようこ「あ…はるなちゃん…この後どうしようか」
はるな「え…」
ようこ「台本、もう一回読んでみる？」
はるな「…今日はもう解散にしよう。台本の続きを書いてみるから」
ようこ「分かった。じゃあ、私たちは帰ろうか」
たけし「あー、そうっすね…お疲れ様でした」
はるな「お疲れ様」
えま「お疲れ様でした」
かれん「お疲れ様でしたー」

たけし、えま、かれん、帰り支度をしてそれぞれ出て行く。

ようこ「じゃあ、私も帰るね」
はるな「うん、お疲れ様」
ようこ「はるなちゃん」
はるな「ん」
ようこ「無理しないでね」
はるな「うん、ありがとう」

ようこ、部屋を出て行く。

暗転

四場

はるながイスに座って台本を読んでいる。
じゅんいちが部屋に入って来る。

じゅんいち「よう」
はるな「…」
じゅんいち「昨日はすまなかったな。別に邪魔しようと思ったわけじゃないんだ」
はるな「…」
じゅんいち「…どうしたんだ、今日は？お前から連絡してくるなんて」
はるな「なんで？」
じゅんいち「え」
はるな「なんで隠してたの？」
じゅんいち「何を？」
はるな「昔、演劇してたこと」
じゅんいち「お前、どうしてそれを…」
はるな「人から聞いたの。劇団のファンだったっていう人から」
じゅんいち「そうか」
はるな「なんで？」
じゅんいち「別に言うほどのことじゃないからだよ」
はるな「そう？だったら何で反対してたの？自分は好きなことやってたのにさ」
じゅんいち「それは…」
はるな「いきなり来て、人の稽古に勝手に口出ししてやってることメチャクチャだよ。強引に諦めさせようとしてるって思うじゃん」
じゅんいち「それは本当にすまなかった。公演も近いのに迷惑かけてしまって」
はるな「別にもういいけど。とにかく私は辞めたりしないから。縁切られてもいいから、自分のやりたいことをやってくから」
じゅんいち「…」
はるな「それだけ」
じゅんいち「…」
はるな「ごめん、呼び出しといて悪いけどそれだけだからもう帰って。台本の続き書かなきゃいけないから」
じゅんいち「そうか…」
じゅんいち、部屋を出て行こうとする。

はるな「ねぇ」
じゅんいち「え」
はるな「一個聞いていい？」
じゅんいち「あぁ、なんだ？」
はるな「お母さんも？」
じゅんいち「え」
はるな「お母さんもお芝居してたの？」
じゅんいち「いや、母さんはただの高校の同級生だよ。公演は観に来てくれてたけどな」
はるな「そう」
じゅんいち「どうしたんだ、急に？」
はるな「別に。電撃引退だったって言ってたから」
じゅんいち「え」
はるな「引退の理由が家庭のことかもって聞いたから、お母さん出て行ったことと何か関係あるのかなって思っただけ」
じゅんいち「…」
はるな「…それじゃ」

はるな、別の部屋に行こうとする。

じゅんいち「はるな」
はるな「…」
じゅんいち「俺は後悔してるんだ」
はるな「どういうこと？」
じゅんいち「いや、後悔というとちょっと違うかも知れない」
はるな「…」
じゅんいち「確かに俺はプロに近いかたちで活動していた。でもそれだけじゃ生活できないからな、アルバイトもたくさんした」
はるな「そう…」
じゅんいち「大変だったけど楽しかった。夢に少しずつでも近づいてるって思ったらワクワクして仕方なかった」
はるな「まぁ、分からなくもないけど」
じゅんいち「だから、あいつもそう感じてくれてると勝手に思ってた」
はるな「…」
じゅんいち「本当になぁ、俺は自分のことしか考えてなかったんだ。お前が産まれてからも家にはあまり居なくてな、全部母さんに任せっきりで…きっと一人で不安だったんだろうな…」

はるな「…」
じゅんいち「あいつと別れた日のことは忘れられないよ。とても静かだった、疲れた目をしてた。きっと言いたい事をいっぱい我慢してくれてたんだな」
はるな「お母さんは何も言わなかったの？」
じゅんいち「あぁ。ただもう終わりにしたいと」
はるな「そう…」
じゅんいち「芝居みたいには上手くいかないもんだな」
はるな「そんなの当たり前じゃん…」
じゅんいち「そうだな。当たり前だ。そんな当たり前のことも気付けなかったんだ」
はるな「…」
じゅんいち「俺は間違ってたんだよ」
はるな「…」
じゅんいち「自分が大切だと思ってたものと大切にしなきゃいけなかったものが…」
はるな「…」
じゅんいち「はるな」
はるな「なに」
じゅんいち「だから、俺はお前のことが心配なんだ」
はるな「え」
じゅんいち「後になって気付いたとき、何も残ってないんじゃないかって…上手くいくやつは本当に一握りの世界だ。簡単なことじゃない」
はるな「そんなの分かってる」
じゅんいち「お前には幸せになってほしいと思ってる。普通の幸せを見つけてほしいと思ってる。嬉しくないだろうけど、お前はお父さんに似てるからな」
はるな「…」
じゅんいち「お前に伝えたいことはそれだけだ。よく考えておいてくれ」
はるな「…」
じゅんいち「台本の邪魔をしてすまなかった。じゃあ」
じゅんいち、部屋を出て行こうとする。
はるな「…決めないで」
じゅんいち「…」
はるな「私の未来を勝手に決めないでよ。そりゃ上手くいかないことだってあるよ。絶対あるよ。私だって自分のこと天才だとか思ってない。それくらい解ってるよ。だったら今頃、もっと輝いてるよ。台本だってもっとスラスラ書いてるよ。でもさ、それと私の挑戦したい気持ちは関係ないの。結果がど

うでもいいの。自分が苦しくなるかもしれない、誰か傷つけるかもしれない。でもとにかく今は前に進んでいたいの。私には今しかないの」

じゅんいち「そうか…」

はるな「しょうがないよね」

じゅんいち「え」

はるな「だって親子なんだもん」

じゅんいち「それもそうか」

はるな「うん」

じゅんいち「分かった。気の済むまでやってみなさい」

はるな「ありがとう」

じゅんいち「邪魔して悪かったな」

じゅんいち、部屋を出て行こうとする。

はるな「それにさ…」

じゅんいち「ん？」

はるな「あんまり言いたくないけど、なんかちょっと嬉しかったよ」

じゅんいち「え」

はるな「だってこんな近くにさ、同じような夢を持ってた人がいたことが」

じゅんいち「…」

はるな「まぁ、そういうとこでつながり感じてみるのもいいかなって」

じゅんいち「あぁ」

はるな「それじゃ」

じゅんいち「あぁ。頑張れよ」

はるな「ありがとう」

じゅんいち、部屋を出て行く。

はるな「さて、出すよ、今から本気だす。やれば出来る子なんだから」

はるな、別の部屋に行こうとする。そこに、えまが入って来る。

えま「あ、はるなさん。お疲れ様です」

はるな「お疲れ様。どうしたの？今日は稽古ないよ」

えま「あ、そうなんですけど…」

はるな「どうしたの？」

えま「あの…お邪魔じゃなかったら、練習してもいいですか？」
はるな「え」
えま「いや、私、足引っ張ってばっかなんで自主練しようと思って。台詞覚えるぐらいなら出来るし、家だと落ち着かなくて…」
はるな「うん、いいよ」
えま「ありがとうございます」

えま、稽古の準備を始める。

はるな「昨日はごめんね」
えま「え、何か言いました？」
はるな「いや、んー、なんでもない」
えま「そうですか」
はるな「書くから。台本、絶対すぐ書くから」
えま「はい、楽しみにしてます。私、はるなさんの台本大好きなんで」
はるな「え」
えま「初めて観たとき、すごく感動したんです。だから絶対ここで一緒にお芝居したいって思って」
はるな「そう」
えま「だからもっと頑張ります」
はるな「ありがとう」

えまは稽古の準備、はるなは台本の続きを書こうとする。
ようこ、たけし、かれんが入って来る。

ようこ「お疲れ様。あれ、えまちゃん来てたの？」
たけし「ほんとだ」
えま「あ、お疲れ様です。どうしたんですか？」
たけし「いや、家に居てもなんか落ち着かないから稽古でもしようかと思って。あ、もちろん、はるなちゃんの邪魔じゃなければね」
はるな「うん、それは全然」
ようこ「はるなちゃんに差し入れしようと思って来たら、そこでバッタリ会ったの。たけしくんとかれんちゃんに」
えま「そうなんですか」
ようこ「でも、えまちゃんまで来てるとはね。みんな、考えること一緒みたいだね」
えま「そうですね」

たけし「せっかく、みんな揃ったんだからしっかり稽古しちまいましょうよ。公演まで、もう日がないし」
ようこ「そうだね、やろうやろう」
えま「はい」

えま、ようこ、たけし、台本を手に稽古を始めようとする。

かれん「私、いつでもいけます」
全員「えぇ」
かれん「台詞、覚えてきました」
全員「え、うそ」
かれん「ほんとです」
はるな「誰の？」
かれん「みんなのです」
全員「みんなの」
かれん「はい」
たけし「すげぇ」
かれん「ふふ、やれば出来る子なんです」
えま「やっぱり要注意だった」
はるな「分かった。でもとりあえず前説からやってみようか」
かれん「はい」
はるな「いい？一番最初にお客さんの前で喋るんだから。すごく大切な役目だよ」
かれん「はい」
はるな「じゃあ、最初からやってみよう。みんなもいける」
ようこ「もちろん」
えま「絶対負けない」
たけし「これが女の戦いか…」
はるな「よし、じゃあやろう。せーの、はい」

前説から芝居が始まる。

幕